

## かかし通り

社会学部

1年

岩田 純

時は江戸末期、ところはある大名の城下町。

気候は穏やか、隣接する港から上がる海産物にも恵まれ、街は行き交う人々の活気でいつも明るかった。

城からのびる大通りは左右に栄える商売屋を従え、大反り橋へ繋いだところで街道に切り替わっている。通りの名は「かかし通り」。言い伝えに基づいてそう呼ばれている。この近辺で事故や災害が起こり、人がたくさん死んだ時、その魂が大勢のかかしの姿になって通っていくのが、このかかし通りだという。

晴彦は今年で二十一を数える、かかし通りの真ん中あたりの長屋に住む物書きだった。この男ときたらとにかく好奇心旺盛で、事件や謎が耳に入ると、何にだって首を突っ込む。読み書きが得意だったから、そうやって調べた物事を記すことで生計を立てている。幼い頃に両親を亡くしたとはいえ、持ち前の行動力でなんとか世を渡っていた。

晴彦はかかし通りの言い伝えが気になって気になって仕方なかった。いくら聞き込みをしても、実際に現場を見た人に辿り着かない。みんな言い伝えは知っている。しかしみんな人づてに聞いたのである。これでは本当に死んだ人の魂が通るのかどうか、怪しいものである。さりとて確かめる方法などない。晴彦は言い伝えの真偽を見極めることができず、日々憂えていた。

そんな折、大きな嵐がこの辺り一帯を襲った。地元の漁師は予兆を嗅ぎつけ、船を繋ぎ家にもった。しかし、くにの外から来た客船はそうはいかなかった。大波を押して出航し、大勢の乗客を乗せたまま沈没した。

多数の死者が出た。

嵐が去っても、街の人々は家に閉じこもり続けた。かかし通りの言い伝えのためだ。

晴彦の長屋の前も静まりかえった。そしてこの状態は三日間続く。言い伝えによると、事故や災害の日から数えて三日目の晩、問題のかかしの行列が現れるという。人々はこの世のものでない者を怖れているのだ。うっかり見てしまわないように固く戸を閉め、絶対に外へ出て来ようとはしない。しかし晴彦だけは別だった。人の魂がかかしになるとはどういうことなのか？ そのかかしはどこから来て、どこへ行くのか？ そして何より、本当にそんなことが起こるのか？ 知りたいという欲求ばかりが胸の中で膨らんで、街の誰よりそわそわしていた。

三日目の晩。随分早くに明かりが消えていった。大人も子どもも頭から深く布団を被り、余計な世界を見ないように目をつむったようだ。だが晴彦だけが、同じように布団を被ったものの二つの目をしっかり見開いて、来るべき時をひたすら待った。

夜が長くなり始める季節だということもあいまって、まるで時間が止まったかのような静寂が晴彦に降った。布団から顔だけを出し、引き戸の向こう側に神経を集中させた。何も聞こえない。

何時間経ったか……晴彦は不覚にもうつらうつらとしてしまった。いけない、寝てしまっ  
ては何にもならない。体勢を変えてしっかり目を開け、戸の外に注意を向け直す。辺り  
は明るくなってきていた。空が白み始めている。

もう夜が明ける。では、言い伝えはただの作り話だったということだ。子どもを早く寝  
かしつける目的などで誰かが言い出したとか、そういう始まりだったのだろう。

晴彦は落胆とも憤慨ともつかない気持ちで布団の中に頭から潜り込んだ。もうこのまま  
ふて寝するしかない。

だが、すぐに晴彦は布団から飛び出した。遠くから、ひどくたくさん鈴の音が重なっ  
て聞こえる。

しゃらん、しゃらん、しゃらん。

一定の調子を保って、音は左から右へ広がっていく。それはつまり、城の方からかかし  
通りを抜け、通りの終わる反り橋へ向かっていることになる。

しゃらん、しゃらん、しゃらん。

最初は微かだった鈴の音は、だんだんはっきり聞こえるようになった。確かに鈴の音が  
幾重にも重なっている。だが何故か晴彦は、神社にお参りに行った時に鳴らす大鈴を思い  
出していた。

晴彦はそっと戸を開けた。

早朝の新しく冷えた空気が晴彦の頬を撫でる。外は思った以上に明るかった。空は晴  
れているのに白っぽく、辺りもどこかかすんで見えた。そして、往くかかしたち。

無数のかかしが神楽鈴を一つずつ手に括りつけ、一本足で跳ねながら進んでいく。かか  
しの顔は黒く翳ってよく分からない。だが晴彦には、それらがかつては人だったことが分  
かっていた。ひとつひとつ、着ている物も違う。女もいるようだし、子どももいるようだ。

しゃらん、しゃらん、しゃらん。

晴彦は興味津々になってかかしたちを観察した。全部が同じ調子で揃って跳ねている。  
そして橋の方へ進んでいく。

否、引っ張られているのだ。

かかしたちは皆、左手に神楽鈴を持っているが、よく見れば右手は太くて透明な綱にく  
つついている。綱は、遠くて霞んでいるが、城のお堀からたくさん生えているようだ。生  
きているかのように伸び、全てのかかしたちを引いている。

晴彦は先頭を見た。綱の先には何も無い。だが、何かがいる。晴彦にはそれが小さな太  
陽のように思えた。

しゃらん、しゃらん、しゃらん。

晴彦は知らず知らずのうちに通りへ出てしまっていた。もっとよく見たい。このかかし  
たちの翳った顔も、何本もの綱が生える堀も、あの二つ目の太陽のようなものも、もっと  
近くで見ようと思った。

晴彦の見る景色が動き始めた。気付けば晴彦の左手首には、神楽鈴が括り付けられて  
いる。右手は、透明な綱を握り締めていた。晴彦が握っているのではない。手が勝手に綱  
に吸い付き、身体が調子に合わせて前進し始めたのだ。晴彦は重さを忘れたように跳ね上  
がり、一步分ずつ前へ引かれる。しかし他のかかしと同じようにはいかず、時折つんのめ  
る。つんのめるが、右手は綱から離れない。

晴彦は隣のかかしを注意して見た。笠を被っている。着物は緋だ。手足は木でできている。だが、顔は黒いもやでできている。どんなに目を凝らしても、もやはもやだった。しかしどこか、うなだれているような、悲しんでいるような、寂しい感じがした。

晴彦は逆の隣のかかしへ視線を移した。やはり顔は黒いもやだ。なのに共通した、冷たい感じが伝わってきた。

前から差す光は、うってかわって暖かい。全ての綱を導く光。物質ではない。まるで光自体が光を放っているようだ。自信に満ち、迷いがない。辺りを埋める白い霧よりも、もっと神々しい気配を振り撒きながら、かかしたちを連れて行く。

晴彦はそう言えばといった感じで、このかかしたちがどこへ向かっているのかを気にしていたことを思い出した。橋を渡って行くのだろうか。橋を渡った後、どこへ行くのか。

しゃらん、しゃらん、しゃらん。

先頭の光はもうじき橋へ差しかかる。だが晴彦は全てをその光に委ねてしまっていた。どこへ行ってもいいのだ。その光を信頼して、身体も心も預けてしまえば、きっと光は全てを良い方向へ導いてくれる。晴彦はそう知っていた。

光は橋を半分渡ったところで、急に高度を上げた。続く綱も強く引かれて軋む。光はどんどん昇っていく。迷わず、真っ直ぐに。綱もぴんと伸び、括りつけられたかかしたちも浮き上がる。光は、本物の太陽と遜色ないほどに存在を増した。

鳴り続ける鈴の音と、やわらかな光に包まれて、晴彦の心はかつてないほどに穏やかになった。晴彦の三つ前のかかしが浮き、二つ前のかかしが浮く。晴彦も反り橋に乗った。そして晴彦の足もついに橋を離れた。踏み切ったわけでも、無理に引っぱられたわけでもない。綱は軋んでも、晴彦の腕には何の重みも加わらなかった。身体が綿にでもなったみたいに、晴彦は上昇する。不思議な心地で、晴彦は地面を見下ろしていた。

そこへ来てようやく、晴彦はどこへ連れて行かれるのか思い至った。両足はすっかり宙に浮いた。このかかしたちはこの世の者ではない。先の嵐で、この世にはいられなくなった者たちが、失った器を人の形によく似たかかしで代用して、あの世へ旅に出るのだ。

晴彦は、まさに旅立とうとしていた。

すでに地面は遠い。右手は離れない。いくら綱から手を離そうと腕ごと引いても、ぴったりと貼りついてびくともしない。空気がずっと冷たくなっていく。優しい光は勢いを増すが、強い風が晴彦に吹きつけられた。どんなに揺さぶっても手は取れない。光はやわらかいが、容赦ない。

街が一望できるほどに高く昇った。光は天へ行くことに何も躊躇っていない。晴彦は地上と天上を交互に見る。なす術がなかった。光は、晴彦を連れて行く。晴彦には抗えなかった。

その時、綱が急に下から強く引かれた。晴彦は大きく揺さぶられたが、上昇は止まった。反射的に、綱を辿って見下ろす。

一組の夫婦が、晴彦のつながる綱を懸命に掴み、地上へ引き戻そうとしていた。上へ誘う力は強い。しかし夫婦のどこにそんな力があるのか、下へ戻す力は負けなかった。徐々に晴彦の身体は高度を下げた。晴彦以外のかかしたちは天へ昇り、光の中へかき消えていく。地面が近付いてくると、夫婦の姿がはっきりしてきた。かかしではなく人の姿だ。晴彦は彼らの着物にどことなく見覚えがあった。顔は白く霞んでよく見えない。

だが、二人は晴彦の死んだ両親である。間違いない。二人で調子を合わせて、晴彦を戻そうとしてくれている。晴彦は口を開けて見ているしかなかった。

地面に足がついた時、綱から右手が離れた。左手の鈴もなくなっていた。綱やかかしはずっかり天へ消え、光だけが晴彦と両親を照らして待っていた。

両親の顔はやはりよく判別できない。しかし苦笑していると思った。二人はじっと晴彦を見つめて、見つめ続けた。両親に会うのは、当たり前だが、久しぶりだ。背が伸びた晴彦が少し珍しいようだった。

「もう、人の道を外れるんじゃないよ」

二人の声が、直接頭の中で重なって響いた。

晴彦は布団の中で飛び上がった。

長屋の自分の部屋だった。橋の上からいつの間にか布団の中に移動していた。もう日は高い。引き戸の外からは雑踏すら感じられる。晴彦はおっかなびっくり起き上がる。足はしっかり地面につき、宙に浮いたりしない。

どうっと冷や汗をかいた。危なかった。あのまま連れて行かれたら、きっと戻って来られなくなっていた。そして両親が、危機から救ってくれたのだ。なんて馬鹿なことをしたのか。あのかかしたちがこの世の者ではないことなど、分かっていたはずなのに。あのかかしたちがこの世を去る悲しみをこらえて進んでいたのを、あろうことか興味津々で観察していたのだ。それは、人の道を外れている。両親はわざわざ姿を現し、それを咎めてくれたのだ。

晴彦はこれまでを深く反省した。そしてかかし通りでのことをおもしろおかしく書き立てることはしなかった。代わりに、あの沈没した船についてを細かく調べ、遠いくにへ向けて知らせを放った。この辺りの急な嵐をあなどってはいけないこと、奇跡的に助かり、岸に泳ぎ着いた者もいること。もうつらい思いをする人が出ないように、悲しみにくれている人も立ち直るように、それだけ願って筆を握った。

まもなく晴彦の名前は広く知れ渡り、晴彦の文章は多くの人に支持された。そして晴彦の硯の横にはいつも、鈴が置かれている。鈴の音を聞きさえすれば、晴彦は二度と人の道を踏み外さずに済むのだと、それだけ語った。

了